

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 愛国の歌：エウリビデス『ヘラクレスの子ら』考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 嘆願劇, 犠牲死, 復讐劇, 愛国の歌 キーワード (En): 作成者: 丹下, 和彦 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/00006198">https://doi.org/10.18956/00006198</a>

## 愛国の歌

——エウリピデス『ヘラクレスの子ら』考——

### 丹 下 和 彦

#### 要 旨

本篇はいわゆる嘆願劇に属する。すなわちイオラオスに率いられたヘラクレスの遺児たちが、アルゴス王エウリュステウスの迫害の手を逃れてギリシア中を放浪したのちアテナイ郊外のマラトンに至り、アテナイ王デモボンに亡命を嘆願する。これを受け入れた結果、アテナイはアルゴスと戦端を開くことになるが、その際神託によってヘラクレスの遺児の一人、乙女マカリアが人身御供にされる。すなわち本篇はまた犠牲劇の要素をも併せ持つ。さらに劇の最終場面ではアルクメネによるエウリュステウス殺害が生じ、復讐劇としての側面もまた見せる。

嘆願劇は嘆願者を受け入れた側に嘆願者から感謝と報恩の言葉が述べられるのが通例であり、本篇ではイオラオスからアテナイ王デモボンに対しそれが述べられる。さらにエウリュステウスからも敗者の命を取ろうとしなかったアテナイ当局の寛大な措置に対する謝意と報恩の言葉が述べられる。この二人に感謝と報恩の言葉を語らせたところに、愛国詩人エウリピデスの姿が見て取れる。

キーワード：嘆願劇、犠牲死、復讐劇、愛国の歌

#### はじめに

ギリシア悲劇に“嘆願劇”と称されるいくつかの作品がある。たとえばアイスキュロス『嘆願する女たち』、ソポクレス『コロノスのオイディプス』、エウリピデス『ヘラクレスの子ら』、同じく『嘆願する女たち』などがそれである。ある事情があって生まれ故郷を追われ他国に安住の地を求めた者が、その地の支配者に受け入れを嘆願して追跡者の手を逃れ、保護と安寧を得るというのが嘆願劇の凡その筋立てとなっている。いわば弱者救済をテーマとする劇である。

ギリシア民族の最高神ゼウスはさまざまな権能を有する神であるが、その一つに嘆願者を統括しその意を代弁するという権能がある。ゼウス・ヒケシオス（嘆願者を守る神ゼウス）<sup>1)</sup> である。最高神にこうした権能を賦与することによって、不当に虐げられ不利な状況に陥れられ

た者の救済措置を、古代のギリシア人たちは考え出したのである。身に迫る危機から逃れようとする避難者はゼウスの社（の祭壇）に身を寄せた。追跡者はゼウス・ヒケシオスの神威を憚って、みだりにこれに手を出すことはできなかつた（そういう不文律が存在した）<sup>2)</sup>。避難者を受け入れる側も同様にゼウス・ヒケシオスの神威を憚ってこれを匿い保護したが、その際事と次第によっては追跡者（加害者）側との紛糾を覚悟しなければならなかつた。悪くすれば戦火を交える事態にまで至ることになった。それゆえ嘆願者を受け入れるについては王（支配者）といえどもその一存で決定することはできず、市民らに受け入れの是非を諮って同意を得る必要があつた。当然受け入れる側は、この危険を冒すだけの覚悟とそれに耐え得るだけの力の優位が要求された。それだけに無事に事を収めると、嘆願者に優しい国という評判が結果として伴うことになった。

上に挙げた4篇の嘆願劇は、おおむね古代ギリシア人の身近かに存在した嘆願とその受け入れの実態を一篇の劇に仕立て上げたものである。そして4篇のうち3篇までが、嘆願者を受け入れる側の共同体としてアテナイを充てている。伝説の上でも歴史の上でも、共同体アテナイは危険を冒しても嘆願者を受け入れるだけの俠気と物理的能力とを備えていたということになる。

ここではその嘆願劇の一つ、エウリピデスの『ヘラクレスの子ら』を取り上げて嘆願劇としての実態とその時代的意味を探りたい。

## 1. 嘆願

アルゴス王エウリュステウスは生前のヘラクレスに難業苦業を課して迫害したが、ヘラクレスが死ぬと今度はその遺児たちにも迫害の手を伸ばした。生前のヘラクレスに忠臣として仕えたイオラオス（ヘラクレスの甥に当たる男）はヘラクレスの遺児たちを助け、エウリュステウスの手を逃れてギリシア中を放浪し、アテナイ近郊マラトンの地に行き着く。そしていまイオラオスとヘラクレスの遺児たち一行はこの地のゼウス神殿に難を避け、祭壇に縋りついてその身の庇護をこの地の王デモポンに嘆願しているところである。

劇のプロロゴス（序詞）はイオラオスによって述べられる。彼は言う、「（ヘラクレスが）天に昇られたいまとなつては、／あの方のお子たち、これ、ここに居るのを翼の下に抱え、／お護りしながら自らも身の安全を願う身。／と申しますのは、この子たちの父親がこの地上を離れてからというもの、エウリュステウスはとにかくまずわれらを亡き者にせんと図りました。／わたしたちは逃げ出した。お蔭で国は失いましたが、／命は助かりました。一つ町から他の町へと国境いを／越え、逃亡の旅を続けております」（9～16行）と。そして「ギリシア中の土地を追われたわたしたちは／いまマラトンとその周辺の地のこの国へ辿り着き、／神々の援

けを願いつつ祭壇の辺に／跪いておるところ」(31～33行)と。

そこへ迫害者エウリュステウスの手先きの使者が追って来て、アルゴスへの帰参を強要する。「さあ来るのだ。頑張っても無駄だ。アルゴスまで／ご足労願おう。石打ちの刑が待ち受けておるぞ」(59～60行)。これに対してイオラオスは次のように応じる、「お断りする。この身は神の祭壇が護ってくれようし、／またわれらが足を踏み入れたこの土地は自由の地だ」(61～62行)。

先に述べたように、神の祭壇は被害者の身の安全を加害者から護ってくれる文字通りの聖域であり、そこからの退去を強要することは誰にも許されてはいなかった。だが使者は禁を破り、力づくでイオラオスらを祭壇から引き剥がして連行しようとする。その揉み合う声を聞きつけて、マラトンの里の長老たちからなる合唱隊が駆けつけ、その場に介入する。「よその方、神への嘆願者は敬われてしかるべきもの。／この方らが無理矢理に神の座を立ち退かされることがあるてはなりません。／正義の女神さまはこれをお認めにはなりませんまい」(101～104行)。またこうも言う、「この国の王にきちんと断わるまえに、あんた、そんな／大胆な真似はすべきではないぞ、客人を力づくで／神の許から引き剥がすなぞ。自由な国を敬う気があれば。そうだろう？」(111～113行)。

嘆願者庇護の慣習は、嘆願者はもちろんこれを庇護する側も周知のことであった。上にあるように、これを妨害する者は正義を蔑する輩と見なされたのである。加えてここには先の62行に続いて避難者を受け入れる側のマラトン(＝アテナイ)が自由を国是とする国であることが強調されている。一般的に言って自由の気風をもつことが嘆願者庇護に必ずしも必須の条件となるのではないが、本篇においては嘆願者を受け入れる国すなわちアテナイにとってその国風を表わすものとしてきわめて重要な要件に挙げられている。続く以下の箇所でも、「この人たちがおまえ(エウリュステウスの使者)の言い分に耳を傾けることになれば、／わたしはアテナイはもう自由の国とは思わぬ」(197～198行)とイオラオスは言い、アテナイ王デモポンも「わたしの国はアルゴス人の／言いなりになるような国ではない、自由の国だ」(286～287行)と言っていることから、それは明らかなことだろうと思われる。

話を戻そう。避難者イオラオスと追跡者の使者とが争うところへアテナイ王デモポンが姿を現わす(120行)。このデモポンに対しても使者は自説を主張し、イオラオスらをアルゴスへ連れ帰ろうとする。「アルゴスの人間であるこのわたしが、アルゴスの人間を連れ帰ろうというのです。／わが国から逃げ出した者ら、祖国の法で／死刑判決を受けた者らを」(139～141行)。そしてもしこの行為に邪魔立てをすれば事態は悪化しようとする、この者らの嘆くさまを見、言うことに耳を傾けて／仏け心を起こすような真似をされますと、事は刃を交える／事態に至りますぞ。われらが一戦交えずして／この者らを解放するなどとは、どうかお考えあるな」(158～161行)。恫喝はさらに続く、「誰のために倒れた屍を埋葬しようというのです。市

民からは／文句が出ますぞ、棺桶に足を突っ込んだ老いぼれ、／いわば無なるものために、また子らのために、／泥沼に足を突っ込むようなことをすると」(164～168行)と。

嘆願者を受け入れる側はそれなりの覚悟が要る。それはつねに追跡者側との軋轢を生むことになるからである。上にあるように、それは戦争行為にまで及ぶ恐れもあるのである。その場合には、共同体の責任ある地位に就いている者は自国の一般市民に他者のために命をかけることを納得してもらわねばならない。共同体の代表者のプライドは満たせても、「市民からは文句が出る」こともあるのである。

アテナイ王デモポンは今そうした立場にある。エウリュステウスの使者はするどい問題提起をしたことになる。慣習どおりゼウス・ヒケンオスの神威を尊び嘆願者受け入れを崇高な義務と見なすことの反面に、それに附随する危険を命を賭けて引き受けるという現実がある。その現実はどう対処するのか。現にイオラオスらがこの地へ来る前に立ち寄ったトラキスやアカイアの町は、彼らの嘆願を拒絶したのである。そういう事情があるからこそイオラオスは熱弁をふるってデモポンに受け入れを要請する。

彼がまず訴えるのは恥の概念である。「だがわたしはここ（アテナイ）の人々の心根と気質を知っている。／死もまた辞せず、というな。卓れた人士は／生きることよりも恥を知ることのほうを大事と考えるのだから」(199～201行)。

次いで彼はアテナイ王デモポンとヘラクレス一族との親戚関係に言及し、同族の<sup>よしみ</sup>誼での救済方を求める。「してこの子らの祖先を迎ってみますと、／ヘラクレスはゼウスとアルクメネの御子、そして／アルクルネはペロプスの娘の子に当たります。あなたの父上（テセウス）と／この子らの父親（ヘラクレス）は従兄弟同士のそのまた子供になります。／デモポン殿、あなたはこの子らとそういう血筋にあるのです」(209～213行)。そしてこうした嘆願をもし受け入れぬとあれば、「あなた個人にとっても、また<sup>おくに</sup>貴国にとっても、これは恥となりましょう」(223行)と、両手で嘆願の枝を差し出し、デモポンの顎に手をかけて迫る<sup>3)</sup>。

デモポンは三つの理由を挙げて嘆願を受け入れることを承知する。第一には嘆願の神ゼウス・ヒケンオスへの顧慮からである。第二にはイオラオスに指摘されたアテナイ王家とヘラクレス一族との縁戚関係である。そして最後にいちばん重要視されるべき要因として、恥の概念があげられる。デモポンはこう誇らかに言い放つ、「そして恥の気持だ。これこそいちばん心せねばならぬ。／もしこの祭壇が<sup>よそ</sup>余所の男の手によって力づくで／丸裸にされるとあっては、自由の国に住居する者とは／とうてい思ってはもらえまい。アルゴスが怖くて／嘆願人を裏切ったとあってはな。首を括るにふさわしい行為だ」(241～246行)と。アテナイの自由の国風がいま一度ここに強調される。それは「恥の気持」を裏打ちする重要な要素である。自由な気風の環境に生活する者であるからこそ、一段と恥には敏感なのである。

かくしてイオラオスの嘆願はデモポンに受け入れられ、エウリュステウスの使者は追い返え

される。「このわたしを虚<sup>こけ</sup>仮にしてここからこの者らを力づくで／連れ去ろうなどと、そうはゆかんぞ。わたしの国はアルゴス人の／言いなりになるような国ではない、自由の国だ」(285～287行)というのがデモポンの最後通告である。イオラオスはデモポンから受けたこの恩恵を多とし、ヘラクレスの子らを論して言う、「(このアテナイを) いかなるときも救けてくれた恩人であり友であると銘記するのだぞ。／そしてこの国には敵となって槍を向けるようなことは、決してあってはならぬ」(312～313行)と。受けた恩を恩で返えずことをきちんと表明することも、嘆願実現の一つの重要な要件である。

イオラオスとヘラクレスの子らのアテナイ亡命は認められた。しかしこのことはアルゴス王エウリュステウスの怒りを買うことになる。アテナイとアルゴスのあいだに戦争勃発が予想される。デモポンは戦争準備に入る。「さて市民らに集会への召集をかけ、／ミュケナイ勢を大挙して迎えうつように／取り計らおう。まずは斥候だ」(335～337行)。次いで、「預言者を集めて犠牲式を上げよう」(340行)というところまで話は進む。しかしここで一つ問題が出来る。

## 2. 犠牲死

それは戦の行方の吉凶を占う犠牲式でのこと、デモポンが「神託を述べ唱う者らを一ヶ所に集め、／これを吟味した」(403～404行)と、すべてに共通する一つの託宣が告げられた。「デメテルの娘御のために乙女を、良き生まれの父親をもった娘を／この手で殺めよというもの」(407～408行)だった。困惑したデモポンは言う、「そなたら(イオラオスとヘラクレスの子ら)に安寧をという／気持はじゅうぶんにある。だがわたしは、わが娘は殺さぬ。／またわが国の市民らの誰も、嫌がるのを無理に殺すことはせぬ」(410～412行)と。先にイオラオスから保護の嘆願を受けたデモポンは、敬神と血縁関係と恥の概念からこれを承諾した。それは崇高と言ってよい決断であり、行為であった。しかし人身御供を要求する神託は、その決断に暗い影を落とす。

他国人(血縁とはいへ)であるイオラオスらを救うのに己の、あるいはまた同朋の身内の誰かを犠牲にする価値は、果してあるのか。それもすでに戦争という重い負担を覚悟した上に、である。崇高な目的と現実的な利害感覚とが衝突する。デモポンは己の娘はもちろん、支配下の市民の娘も人身御供に選び提供することは、「(わたしは) 異国の民にあるような独裁君主ではない」ゆえに、できないと言う。デモポンは進退<sup>きわ</sup>谷まり、解決策をイオラオスに諮る。「さあ、いま厳しいせめぎあいがそなたの目前に控えておる、異国からの嘆願人を助けるのを正当と見る人たちと、／いやそうするわたしの無分別を非難する人たちとのな。／わたしがわたしの言うとおりにすれば、／たちまち内戦がもち上がる。／さあ、よく見ていっしょに考えてもらいたい。／どうすれば自分たちが、それにこの国土が助かるのか。／このわたしが市民から

非難されないで済むのか」(415～422行)。

こう言われて、しかしイオラオスにも名案があるわけではない。思いつくのはただ一つ、わが命と引き換えにヘラクレスの子らの救命とアテナイの安堵とをアルゴス王エウリュステウスに申し入れることぐらいである。しかしそれが一向に効力の期待できない策であることは、デモポンも承知である。両者とも進退谷まる。

このときイオラオスら一行に同道していたヘラクレスの娘マカリアが、その身を犠牲に供することを申し出る<sup>4)</sup>。デモポンにとっては有難い申し出である。アテナイの子女を犠牲にせず済むからである。イオラオスには不憫に思われる。しかしこれ以外に方法がないことも、彼にはわかっている。せめてもと、犠牲となる役をマカリアと妹たちとのあいだで籤引で決めたらと提案するが、マカリアにあっさり拒否されてしまう。イオラオスはそれ以上異は唱えない。マカリアは犠牲式の場へと赴く。

ユウリピデスには若い乙女の自己犠牲死を扱った劇は、これ以外にも『アウリスのイピゲネイア』、『ヘカベ』などがある。いずれでも自己犠牲を決意するまでの本人の躊躇と逡巡、周囲の近親者の悲嘆、愁嘆が丹念に描かれている。イピゲネイアもヘカベの娘ポリュクセネも人身御供にされる身の不幸を知らされると、当初はこれを泣き嘆くが、やがて自ら進んで死に赴くことを表明するに至る。前者はその行為が祖国ギリシアを救うことに繋がると信じるからであり、また後者は奴隷に身を落す前に自由人としての死を選ぶからである。

本篇のマカリアは自らの犠牲死を徒らに嘆くことはしない。自らの死が弟たちを救うと同時にアテナイの国をも救うことになるのを、最初から知った上での自発的な死である。彼女は言う、「爺(イオラオス)よ、わたくし指図されるより前に／刃にかかって死ぬ覚悟です。／この国はわたくしたちのために大いなる危険を／引き受けてもよいと言ってくれています。ところがわたくしたちは／彼らを救えるのに、他人の彼らに苦勞を押しつけて、死なずに／済ませようというなら何をか言わんやです。／そんなことはできません。それこそお笑い草ですもの」(501～507行)と。彼女には自らの死に対する嘆き、あるいは逡巡といった思いはない。いや、すでにそれを超越したところから彼女は行動している。彼女は、いわばアテナイへの義理と自らの名誉のために、言い換えれば自他に対する恥の意識から死ぬのである<sup>5)</sup>。

このマカリアの姿を、デモポンはもちろん、イオラオスもまた徒らに嘆き悲しむことはしない。合唱隊(マラトンの長老たち)もそうである。彼らの言辞はむしろその健気さ、潔よさ、勇気を賞讃することに費される。愁嘆場が短い(ほとんど無きに等しい)ことは、マカリアの周囲の人間が彼女と血縁関係にない男性ばかりである(イオラオスのみ遠い縁戚にあるが)ことも影響していよう。他の2作品の場合はいずれも当人の母親であるクリュタイメストラ、ヘカベである。血縁の娘との不条理な別離は涙の因とならずには済まされまい。ただマカリアにも血縁の女性が欠けているわけではない。逃避行を共にしている祖母のアルクメネである。し

かしいま彼女は神殿の奥深くに身を置いていて、自らの意志で死を決意し死に赴くマカリアとは没交渉である。もしもイオラオスに代わってアルクメネがこの場にいたとすれば、クリュタイメストラやヘカベのと同様の愁嘆場が演じられたかもしれない。

ただ生贄の場へ赴くマカリアを見送ったあと、さすがにイオラオスも憔悴した姿を見せる。「お子たちよ、わしはもうだめですじゃ。身体の節々が悲しみで／ぐったり。さあ、この身を掴まえてそこの祭壇の脇へ据えてくだされえ」(602~603行)。

一般的に見て、本篇の犠牲死の場の描写は同上の2作品の場合と比較して、いかにもあっさりとして済まされている。『アウリスのイピゲネイア』では劇末のエクソドスの場でイピゲネイアの代わりに鹿が生贄となり、イピゲネイアは神の許へ飛び去ったと使者に語らせている。

『ヘカベ』では、ギリシア軍の伝令タルテュビオスがアキレウスの墓前でのポリュクセネの見事な最期を賞讃と悲嘆の念を込めて報告する。

本篇ではその死の場からの報告が欠けている<sup>6)</sup>。従って報告を聞いて嘆く人物も場も不要となる。これもまたマカリアに祖母アルクメネでなくイオラオスを配したのと同様の意図的措置であったとも考えられる。マカリアの登場は、その健気さへの賞讃とそして悲嘆を表示するためのものであるというよりは、その登場によってアテナイ軍の出陣と、そしてそれに伴うイオラオスの参戦を促進する触媒の働きをするものであったのではないかということである。いま劇の筋は戦いの場へと急いでいるのである。

『アウリスのイピゲネイア』も『ヘカベ』もいわゆる嘆願劇ではない。本篇は嘆願劇である。そして同時に犠牲死も組み込まれている。先述したように、嘆願劇では嘆願が受け入れられる場合、受け入れる側は共同体全体の賛意が必要である。そのあとに起こる(はずの)追跡者側との紛糾(たいていの場合戦争となる)に当るためである。マカリアの死はアテナイ市民を安んじて紛糾に当らせるために不可欠の要件であるが、それは嘆願劇としての筋の流れの一コマに過ぎないものでもあるのである<sup>7)</sup>。作者も観客も彼女の死に長々と関わることはできないのである。生贄となる乙女マカリアに嫋々たる愁嘆を表しかねないアルクメネではなく無骨なイオラオスを配し、生贄のあともその死に際の様子を報告させなかったこの処置は、嘆願劇の形式を踏んでこのあとイオラオスの奮戦ぶりへと描写的を絞ることに急な作者に当然のことではあるまいか。

### 3. 戦闘とその後

アルゴス軍とアテナイ軍とのあいだに戦端が開かれる。その戦場の様子が伝令の口を借りて知らされる(第4エペイソディオン)。聞き手はアルクメネである。

戦況は、最初アルゴス軍優勢のうちに推移する。次いでアテナイ軍が盛り返し、アルゴス軍



を背走させるに至る。老イオラオスは偶々通りかかったヒュロス（ヘラクレスの子）の戦車に便乗し、敵将エウリュステウスの駆る馬を追跡する。ここまで語った伝令は、これ以後の話は伝聞情報であるとしてこう言う、「ここからお話しするのは他人から／聞いた話です。これまでは手前が自分で見たことでしたが」（847～848行）と。その他人から聞いた話というのは“イオラオスの若返り”という奇蹟譚である。老イオラオスが追跡の途中とつぜん若返り、瑞々しい青年となった。その様子は以下のように描写されている。「彼の方（イオラオス）はへべとゼウスの両神に今日一日若返り、／敵に正義の鉄槌を下させ給えと願懸けなされた。／するとあなた、あなたも聞かれて驚くようなことが起こったのです。／二個の星が輓に繋がれた馬の傍らに立ち現われ、／戦車を黒雲で隠してしまったのです。／<略>そしてその見通しのきかぬ闇の中から／イオラオス殿が若々しい姿となって現われ出たのです。／その名に負うイオラオス殿は、エウリュステウスの四頭立ての戦車を／スキロンの岩場のところでついに捕まえました」（851～860行）。

この突然のイオラオスの若返りは、主人ヘラクレスを長年傷め続けてきた積年の宿敵エウリュステウスを生きのまま捕獲するために必要な仕掛けであったと解されるが、それにしてもいかにも不自然である（作者もそれを意識してか、伝令にも他人から聞いた話であると言わせて出所を曖昧にしている）。そのためか現代の評家もこれをエウリビデスの創作とするかテバイの古伝説に根拠を求めるべきか、迷っている<sup>8)</sup>。先行作品のアイスキュロス『ヘラクレスの子ら』（断片）は、残存断片中にはこれに触れたところがないゆえに不明である。またピンダロスの当該箇所（『ピュティア讃歌』第9歌79～81行）では、若返り現象は明白には言及されていない。そこではすでに黄泉の国の住人となっていたイオラオスが神々の許しを得て生き返り、エウリュステウスを殺害したのち再び泉下へ帰ったという話になっている。これは若返りとはちょっと違う<sup>9)</sup>。

いま一つ問題点がある。若返ったイオラオスがエウリュステウスを生きのまま捕虜として連れ帰ったことである。ピンダロスではその場で首を切り落して殺害したことになる（同上80～81行）。アイスキュロスでは不明である（残存断片にはそれに言及した箇所はない）。本篇ではこのあとアルクメネとの対面の場が設定されてあるために、生かしておくことが必要である。伝令からのこの報告を聞いたアルクメネは、「ところでイオラオスはいったいどんな下心があって／エウリュステウスを赦して、死なずに済むようにしたのでしょうか。／言ってください。敵を捕えてこれを罰しないというような／そんな考えはわたしには得心がいきませんから」（879～882行）と言うが、アルクメネ、エウリュステウスという宿敵同士が劇の最終場面で対面し、互いの思いをぶつけ合うためには、生きのまま捕虜にすることはどうしても必要な措置だったのである。

では作者はこの劇末のアルクメネ、エウリュステウスの対面の場をどういう意図で設定した

のであろうか。ある評家（Allan）はこれをエウリピデスの創意とするが<sup>10</sup>、その創意とはどのようなものであったのか。

「おお憎き奴、やって参ったか。正義の神もついにそなたを捕えたか」（941行）というのが、エウリュステウスと対面したアルクメネの第一声である。以下彼女は宿敵エウリュステウスを前に積年の恨みを述べたて、「数多くの苦しみ悲しみを作り出してきた／そなたには死は必定」（959～960行）と死罪を要求する。しかしこの要求はアテナイ当局によって拒否される。アテナイでは生け捕りにした捕虜の命を奪うことは禁じられているのである。承服できないアルクメネは、「だがこの仕事、なんとしても果たしてやる」（980行）と言い募る。その彼女を彼女の召使が、この男を殺すのを許されている人間は誰一人いない、もしそんなことをすれば矢のような非難を浴びせられようと諫める。ただこの地マラトンの長老たちから成る合唱隊の面々からは、ご老母よ、あなたのこの男に対する敵愾心はよくわかると、一定の理解を示される。では当のエウリュステウスの言い分はどうか。

彼は「ご婦人よ、よくご承知おき願いたい、わたしはそなたに媚びるつもりはない。／またこの身の生き死にのことで、あるいは怯懦との誇りを／受けまじきことは何一つ口にはせぬ」（983～985行）と口を切り、冷静にその思うところを述べる。ヘラクレスおよびその子供らに敵意を抱き殺戮と追放を求めたのは、すべてヘラ女神の企みによるものだというのがその骨子である。そしてそれは自らの身の安寧を図るための行為であったのである。「そなたがわたしの立場になれば、／敵対する獅子の禍々しい仔らを／悪意をもって追い立てることなく、穏やかに扱って／アルゴスに住むことを許す——そんなことは誰も信じまい」（1005～1008行）と。そして続けて、「先ほどは死を望んでいたわたしを殺さずにおきながら、／いまになってこの身が人の手で殺められて死ぬことになるとすれば、／ギリシアの法としてこれは汚点となりましょぞ。／この国は分別を働かせてわたしを無罪放免としてくれたのです、／わたしへの敵意よりも神の意こそを重く汲み取って」（1009～1013行）と言う。

聞いていた合唱隊は、アテナイの国意としてエウリュステウスの放免を進言する。しかしアルクメネはあくまで彼の死を要求する。「この男は死ぬ、それでいてわれらはこの国（アテナイ）の意に従う、となればどうです」（1020行）と。具体的には、「この者を殺し、／そのあと死体を追ってきた仲間の連中に／渡すのです。こうすることで身柄についてはこの国の方針に従うことになり、／この者は死んでわたしからの罰を受けることになるのです」（1022～1025行）というのである。事ここに至ってエウリュステウスは死を覚悟する。そして合唱隊を相手に遺言を言い残す。「わたしが死んだら、<sup>さだめ</sup>運命のとおり<sup>おとめがみ</sup>に埋葬してもらいたい。／パレネの処女神（アテナ）の社の前だ。／そうしてくれれば、そなたには好意を、この国には安寧を心がけ、／外来市民としてこの地にずっと居つづけることになろう。／だがこの子らの畜の者がそなたらの好意を裏切り、数を頼んでこの地へ／押し寄せることがあれば、わたしはこの上な

く／手強い敵となろう」(1030～1036行)というのがそれである。

ここでエウリュステウスは変容する。

#### 4. エウリュステウス、変容の意味

エウリュステウスはどう変容するのか。突然だが、アイスキュロスが描く『オレスティア』3部作に話を移す。あそこに登場する復讐の女神エリニースたちは、第3作目の『慈悲の女神たち』で慈悲の女神エウメニデスに変容する。それまでオレステスの母親殺しの罪を厳しく追求し、オレステスがアテナ女神主宰の裁判の席で無罪放免となったことについて非を唱えていたエリニースたちは、アテナの度重なる勧告を受け入れ、今後はアテナイの地に留まってあらゆる不正非道の監視役、正義の目付け役としてアテナイの地を弥栄へと導く存在に変容する。文字通り復讐の女神が慈悲の女神に変貌するのである。

本篇におけるエウリュステウスにもこれに似たところがある。彼はヘラクレスの子らの争奪をめぐるアテナイ当局と敵対した。しかし戦いに破れ、いま虜囚の身となっている。アテナイ当局は戦いに勝利し、嘆願者のヘラクレスの子らの安全と保護が確定した以上、敵対したアルゴス王エウリュステウスの死までは求めない。「アルクメネさま、いささかご忠告申し上げますが、／この男、放免なされませ、国がそうしろと申しておるのですから」(1018～1019行)という合唱隊の言葉がそれを明瞭に物語っている<sup>11)</sup>。エウリュステウスはこれを多とし、将来ヘラクレスの後裔がアテナイを攻めるようなときが来た場合、これを防禦する役割りを果たして恩義に報いるとしている。かつて敵対した者が勝者の雅量に感じ入り、怨讐を越えて以後は恵みをもたらす存在へと成り変わろうとするのである。アテナイ当局の手を煩わし身の安全を確保してもらったヘラクレスの子らのほうこそ、本来その恩義の念を表明してしかるべきである。エウリピデスのいま一つの嘆願劇『嘆願する女たち』では、遺体収容でアテナイから多大な援助を受けたアルゴス王アドラストスは劇末で感謝と報恩の気持を吐露する(1176～1179行)。しかもそのあとデウス・エクス・マキナとして顕現したアテナ女神はテセウスに向かって、今後アルゴスの国はアテナイを武力攻撃することのないこと、またアテナイが他国から武力攻撃を受けた場合はアルゴスは援軍を送って助力することをアルゴスに誓わせよと言っている(1191行以下)。それほど嘆願と保護の代償は大きいのである。本篇の場合、それが完全に欠けているわけではない。劇の前半、アテナイ王デモポンが最初に嘆願の受け入れを表明した段階で、先述のとおりイオラオスはそのことを表明している(312行以下)。

この報恩表明の場が劇中であって劇末に置かれていないこと、加えてアルクメネの主張通り<sup>12)</sup>エウリュステウスが殺されてしまう結末は、この劇が嘆願劇であると同時にまた復讐劇としての側面をも含むことを示すものであろう。「さあ供の者たち、こ奴を連れて行け。そして／殺

して犬にやるのじゃ」(1050～1051行)というアルクメネの言葉は復讐成就の凱歌である<sup>13)</sup>。

イオラオスの報恩の言葉よりもエウリュステウスを変容させ、その報恩の言葉を劇の最後に置いたのは、おそらく作者の意図に沿ったものであろうが、意味深いものがある。

伝説では、ヘラクレスの子らのそのまた裔の者たちは時を経て父祖の地ペロポネソスへ帰還することになっている。この背景には前11世紀ごろイリュリア民族運動に関連してギリシアの地に南下侵入してきたドーリス人についての歴史的記憶が存在しているかに思われる。そのドーリス人の根拠地スパルタは、歴史時代の前5世紀後半になってアテナイの宿敵と化す。その具体的な闘争は前431年から前404年まで続いたペロポネソス戦争であるが、両者の中間地域に位置するアルゴスの動向はアテナイにとって看過できぬ重要問題であったろう。劇末のアルゴス王エウリュステウスのアテナイに対する報恩の言葉は、ここで切実な意味を帯びるものとなる<sup>14)</sup>。ペロポネソス戦時下、アテナイはアルゴスをスパルタ側へ追い遣うことはできなかった。これはその帰趨に敏感なアテナイ市民へのメッセージ性の強い言葉だと言えるのではないか。ここでエウリピデスは愛国詩人となったのである。

アテナイは双方に恩を売った。ヘラクレスの子らを受け入れることによってイオラオスからの報恩の言葉を引き出した。その結果、嘆願者に優しい国という世評を獲得した。一方敗軍の将エウリュステウスを助命(結果的にはアルクメネに殺されることになるのだが)することによって、彼から報恩の言葉を引き出した。

嘆願劇の一般は嘆願者を受け入れることによって嘆願者側からの感謝と報恩の言葉を引き出し、かつ嘆願者に優しい国柄との評判も獲得して終わる。本篇には今一つの感謝と報恩の言辞が加わる。アルゴス王エウリュステウスのそれである。これにはきわめて当世風の政治感覚が込められているように思われる。いわば政治劇としての色合いが強調されているのである。嘆願劇として始まったものが政治劇的色彩を帯びたものに終わる。その変転には復讐劇(アルクメネのエウリュステウスに対するそれ)も介在した。むしろ介在することで嘆願劇が政治劇と化したのである。

本篇のもつこの政治劇の様相は、ペロポネソス戦争開戦直後と想定されている上演年代と<sup>15)</sup>、おそらく無関係ではない。もう一度繰り返せば、ここでエウリピデスは愛国詩人となったのである。

## 註

1) ヒケシオス(hikesios)は「嘆願者を統括するの意。つまりゼウスは嘆願者の権利の代言人ということである。

2) 中には物理的な暴力によって祭壇から引き摺り出し死に至らしめる、あるいは神殿内で殺害するとい

う乱暴な例もないことはなかった。

- 3) 羊毛を巻いた小枝を差し出し、相手の膝を抱く、あるいは相手の顎に手をかけるというのは、嘆願者が嘆願を行なうときの決められた作法であった。
- 4) マカリアは系図の上ではヘラクレスとデアネイラの娘。一般に“ヘラクレスの子ら”と言われるのは男子ばかりを指す。Wilkins は本篇のマカリア像はエウリピデスの創作であるとして、無名のローカルヒロインをマカリアと名付け、マラトンに実在する泉水と関連づけたのではないかと言う。Cf. Wilkins, *Euripides Heraclidae*, Oxford, 1993, p. xix.
- 5) ここにトゥキュディデスの伝えるペリクレスの葬送演説における婦徳のすすめとの関連を見る向きがある。Cf. J. Ferguson, *A Companion to Greek Tragedy*, University of Texas Press, 1972, p. 266, 270. これは本篇の上演年代設定との絡みで主張されているものであるが、一概に否定され得ぬ面がある。
- 6) Cf. A. Lesky, On the Heraclidae of Euripides, In: *Greek Tragedy*, ed. by T. F. Gould & C. T. Herington, Cambridge U. P., 1977, p. 228. Kirchhoff は629行以下にマカリアのその後を告げる何行かの欠損を想定する。Cf. A. Kirchhoff (ed.) *Euripidis Tragoediae*, Berlin, 1855, note on V. 627. またテキスト毀損問題については G. Zuntz, “Is the Heraclidae mutilated?” *CQ* 41 (1947), P.46–52 を参照。
- 7) 同じエウリピデスの嘆願劇『嘆願する女たち』では、嘆願を受け入れる側のアテナイ王テセウスは市民から受け入れの最終的承認を得る必要性を述べる(349行以下)が、そのために一場面が設定されることはない。365行以下の第1スタンモンの間にその話は解決されてたことになっていて、第2エピソードに入るとアテナイ軍の出陣は既定事実と化している。
- 8) たとえば Wilkins はテバイの古伝説にあったとする (*Op. cit.*, p. xvi). Allan も同様である。Cf. W. Allan, *Euripides the Children of Heracles*, Warminster, 2001, p. 26.
- 9) のちオウィディウスはその『変身物語』(巻9、397行以下)に産毛の生えた少年に若返ったイオラオスを登場させている。
- 10) Cf. Allan, *op. cit.*, p. 29.
- 11) この場にはアテナイ王デモボンは登場していない。本来ならデモボンを前にした場でエウリュステウス対アルクメネの争論が展開されるべきだと思われるが、そうっていない。
- 12) アルクメネは先のエウリュステウスの言葉(1030行以下)尻を捉えて、エウリュステウスは「死んでこそ(アテナイの)役に立つ」のだから殺すことに反対あるまいという論法を用いる。
- 13) この激越な語調は同じエウリピデスの『ヘカベ』のポリュメストルに対するヘカベのせりふを思い出させる。「俺に勝ち誇り、喜んでいるのだな、なんという悪い女だ」というポリュメストルに対してヘカベはこう言い放つ、「仕返しできて嬉しいのだ、どこが悪い」(1258行)と。
- 14) Allan はこの点について、悲劇は政治的プロパガンダの場ではないと言いつつも、やはり時代思潮と無関係ではあり得ないとしている。Cf. *op. cit.*, p. 44.
- 15) Ceadel は『メディア』(前431年)以後で『ヒッポリュトス』(前428年)前後とし、Zuntz は前430年のスパルタの第2次アッティカ侵攻直前、また Wilamowitz は前430–427年とする。

(たんげ・かずひこ 外国語学部教授)